



東京にも雪が降り、また寒さが戻ってきた。正月は二日休んだ。新年会も一応終わって、仕事に精を出さねばいけないのだがどうも気持ちが乗り切れない。本当は今月中に公園のデザインと設計をほぼ完成させないといけないのだがやるべき作業の幅と量が多すぎて、さてどこから手をつけて、どうしたらいいものか、じりじりじりじりと気持ちが追い込まれてくる。考えを、夢を、想像を形にしていかなければいけないのだが、一つに絞ることに自信がまだ持てない。つい作業が楽な方に走ってしまいそうな自分に迷いが見える。まあ何をやるにしても歩き始めははかどらないものだ。そんなはかどらないことをやっているとふっと、旅の日々を思い出す。風が強く吹き抜ける北の島をおだやかに覆

ている草原の村々を自転車であちこち回ったことがあった。畑地はゆったりとした起伏を持って広がり、海は荒れながらも輝き、空は青く大きく、乱れない大気の流れを力強く抱え込んで深く澄んでいた。何日も歩いた果てに岩陰に凍える風をよけながらガスにかすんでいく最高峰の雪と岩の姿を凍えながら見つめていた。熱帯のゆらゆらと陽炎が立ち上る水田と、はじけるような緑の中に広がる子供たちの歓声。そして友人たちと馬で超えていった草原の途切れることのない風の流れ。人工衛星の流れる光を追った、火を囲んだ酒の夜。そのどの場面にもたくさんの人が生きていた。そんな甘味なものが追い詰められた頭に次々と浮かび出てくるのだ。

そんな中に気持ちが逃げたわけではないのだが。人が生きるというのはどういうことなのか、当たり前だということはどういうことなのか、いろいろな生き方があるのに、今の生き方に流されていないかと、そんなことを考え始めるのです。まあ、考えても流されていくものはとりあえずしよがないし、とりあえず、徹夜の何日かはやってでも目先の危機を乗り越えることになるのだが。それでも何度でも自問し、たまたまここに暮らしてこれが当たり前だと思っていることをずるずるとやっていたいいのかと、今暮らしている時の流れをもう少し高みから見下ろしてみたいとそんな考えに襲われます。やっぱりなんだか弱気だな。最近コンピュータに向かってその姿そのものにも嫌気がさしてきているんだ。確かに、コンピュータは今までは想像も出来なかったくらい多用途で優れた道具であり新しい可能性をも生み出したのだが、見回すとみんな同じ格好でディスプレイに向かってうずくまっている姿が病的で。その一人である自分に嫌悪感さえ感じます。

生身の人間としてあればいいのだ。あのお寺の暗闇で仏像にじっと祈る少年になれないのか、午後の遅い夕陽をあびてゆっくりとお茶をのみながら人と心楽しく話す老人になれないのか。明け方の風の流れにしっかり顔を向けて川の流れを見つめる青年になれないのか。そんな生き物らしい時間をたくさん持つものになれないのか。今の自分からずっと抜け出して少し高いところから自分を見下ろすと、もう少しで「はっ！」と気付いて、そういうものになれそうな気がするんだが。

今月はそんな思いにジリジリと焼かれる日々が続く。午後の早い時間にウイスキーをカップについでじっと自分の内側へ目を凝らす。何も無いところに命が宿り、新しい公園で憩う人が見えてくる。遊ぶ子供達の声が聞こえる。祭りの様子が浮かんでくる。いろいろなディテールが見える。朝と昼、夕方の人々、夜の静まったたずまい、それらが一斉に立ち上がってきてそれを人に伝えるために、またコンピュータの前に座らなければならないようだ。人が生き物らしく暮らせる場を作るために、またディスプレイを見つめる日々が続きます。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX03-5600-0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com